

日時 10月3日(金) 15:30~17:30

会場 奈良県橿原文化会館 大ホール

今を生きるあなたに知ってほしい 「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」

登壇者

コーディネーター：

島本 太香子 (奈良大学 副学長・理事、奈良県子ども子育て推進会議 会長、奈良県医療審議会 委員、産婦人科医)

シンポジスト：

木村 文則 (奈良県立医科大学産婦人科学講座 教授、奈良県立医科大学附属病院高度生殖医療センター長、国際体外受精学会 理事、日本がん・生殖医療学会 理事)

高木 麻衣 (株式会社タカギ 代表取締役社長)



I. 趣旨説明

「現代女性のリプロダクティブ・ヘルス/ライツ (女性のライフステージを通じた健康支援の立場から)」

島本 太香子

1. 分科会の主旨とめざすもの

本分科会では「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ (性と生殖に関する健康と権利)」について、次世代を産むことに関する生物学的基盤と最先端医療を共有し、現代社会で自分らしいライフコースを選択することを学び、男女が互いの生物学的特性を理解・尊重し合い、それぞれの特性をいかしていける社会づくりについて考えることを目的としています。



2. リプロダクティブ・ヘルス/ライツとは

「リプロダクティブ・ヘルス」とは、性と生殖に関する健康＝性と生殖について身体的、精神的、社会的に良好な状況にあること、「リプロダクティブ・ライツ」は、性と生殖に関する健康について、自分の意思が尊重され、自分の身体に関することを自分自身で決められる権利のことを指します。つまり、「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」は結婚する、しない、子どもを産む、産まない、産むとすれば時期、人数、間隔などを選択・決定する権利（自己決定権）で、そのために必要な情報と手段を得ること、避妊、不妊治療、生殖器のがん、性感染症の予防や治療、母子保健、育児支援など幅広い領域に関わる概念です。

3. 女性医学と性差医療の視点

医療の現場では、QOL（生活の質）やWell-beingを守るための予防的な「女性医学」が重要視されています。女性専用外来では、身体の仕組みの違いだけでなく、家族や社会での役割といった背景も考慮した診療が行われます。また、男女で病気の現れ方や薬の作用が異なる点に着目する「性差医療」の視点も、適切な治療や社会的な健康課題の解決に不可欠です。

4. 現代女性の健康課題とホルモン変動

女性の健康は、一生を通じて女性ホルモン（エストロゲン）の大きな変動に影響を受けます。思春期から閉経期にかけて、月経困難症や更年期障害など、年代ごとに課題が変化します。特に現代女性は、過去の女性に比べて出産回数が減少し、生涯の月経回数が劇的に増加しました。そのため、月経にまつわる症状といかに向き合い、快適に過ごすかが現代的な健康課題となっています。

5. プレコンセプションケア（Preconception Care）と次世代への責任

リプロダクティブ・ヘルス/ライツの中でも、特に近年注目されているのが「プレコンセプションケア」という概念です。プレコンセプションケアとは、若い男女が将来のライフプランを考えながら日々の生活や健康と向き合うことを指します。最近の調査研究で、妊娠中だけでなく、妊娠中あるいは妊娠前の女性の健康状態が、本人の将来の健康だけでなく生まれてくる次世代の健康にも大きく影響することが示されており、満ち足りた自分（Well-being）の実現につながるヘルスケアとして注目されています。

妊娠・出産は男性も共に関わる問題であり、人生100年時代において、すべてのライフステージでいかに健康に過ごすかが、個人のWell-beingと次の世代の未来につながります。

II. 講演

「今を生きるあなたに知ってほしい「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」がん患者の未来を作る」

木村 文則

1. がん治療の進歩と子どもの未来

現代のがん治療は目覚ましく進歩しており、小児がん（白血病など）の5年相対生存率は80%を超える時代となりました。かつては不治の病とされたがんを克服できるようになった今、医療の目的は単に命を救うだけでなく、がん経験者が自分に自信を持ち、人間として生きていく力を守ることに広がっています。特に10代から20代の子どもや若年層のがん患者にとって、将来子どもを持てるかどうかという不安は、人生の大きな課題となっています。

2. がん生殖医療のブレイクスルー

がん治療（抗がん薬や放射線）は、卵巣にダメージを与え、不妊症や早発卵巣不全を引き起こす

リスクがあります。そこで重要となるのが、がん患者が命を救われた後に子どもを持てる可能性を残すための医療である、がん・生殖医療です。

1997年、ベルギーのDonnez J博士が世界で初めてがん患者の卵巣組織を凍結保存し、治療後に解凍・移植することで2003年に自然妊娠・出産に成功しました。この出来事は世界に大きな衝撃を与え、現在では同様の方法で200人以上の子どもが誕生しています。



3. 日本における妊孕性温存（にんようせいおんぞん）の歩み

日本でも2010年頃から、白血病治療前に卵子を凍結保存した女性が回復後に出産した事例などが大きく報道されるようになりました。現在では、未受精卵を凍結する「卵子凍結」や、受精した卵を凍結する「胚凍結」、さらには卵巣そのものを一部凍結する「卵巣組織凍結保存」といった手法が広がっています。

4. がん治療が妊孕性に及ぼす影響

がん治療の種類によって卵巣への影響は異なります。特定の抗がん薬は成長中の卵胞だけを攻撃するため、一時的に機能が弱まっても半年から1年程度で回復する場合があります。しかし、直接卵子に悪影響を及ぼすような治療では、卵巣機能が失われてしまうリスクがあります。医療現場では、米国臨床腫瘍学会（ASCO）などのリスク評価基準に基づき、患者一人ひとりの状況に合わせた診療が行われています。

5. 妊孕性温存の具体的な手法

- **胚凍結・卵子凍結**：体外受精の技術を用い、約10日間の排卵誘発を行って卵子を取り出します。結婚している場合は「胚（受精卵）」として、未婚の場合は「未受精卵」として凍結します。
- **卵巣組織凍結保存**：手術（主に腹腔鏡）により卵巣の一部を切り取って凍結します。この方法は、治療を急ぐ必要がある場合や、排卵誘発が難しい小児患者などにも適しています。凍結した組織を将来体内に戻すことで、自然妊娠の可能性を残すことができます。

6. 経済的格差と助成金制度の設立

かつて外来で受診した19歳の看護学生が費用の問題で治療を断念せざるを得ないという悲壮な場面に直面し、経済的格差によって治療の選択肢が失われる現状に強い危機感を抱きました。そこで、地方自治体への粘り強い交渉を行い、妊孕性温存治療に対する助成金制度を実現させました。この動きは全国へ広がり、令和3年には厚生労働省による国の助成制度として確立されました。

7. 奈良県立医科大学の取り組み

奈良県立医科大学では、2024年に「高度生殖医療センター」を設立しました。日本の人口減少が進む中で、持病を持つ方の不妊治療やがん・生殖医療を含む高度な生殖医療を提供し、患者の希望を支える体制を整えています。

8. 結びに：患者の「生き方」に寄り添う医療

がん生殖医療の本質は、病気の治療そのものではなく、患者が自らの生き方を選択するリプロダ

クティブ・ヘルス/ライツに基づいた医療です。がん治療は患者の人生を一時的に立ち止まらせてしまいますが、医療者は患者が「どう生きたいか」「何をめざしているのか」という人生の目的を鮮明に理解する必要があります。医療者として大切なのは、中立な立場で客観的な事実や数字を提示し、患者が自らのバックグラウンドに基づいて最適な選択を行えるよう支援することです。個別の状況や価値観に応じ、患者が何を大切に思っているのか、何を守ろうとしているのかを深く理解し、医療を提供していきたいと考えています。

Ⅲ. 活動報告

「若い世代への取り組み Happyプロジェクト」

高木 麻衣

1. 企業としての社会貢献活動「Happyプロジェクト」

株式会社タカギは、橿原市で95年前に創業した女性を中心とした肌着メーカーです。長年にわたり、生地開発や月経中に快適に過ごせるショーツなどの製品を通じて女性の体と向き合ってきました。社員の8割を女性が占める企業として、製品を通じて培ったノウハウを社会に還元したいと考え、2018年に「Happy (ハッピー) プロジェクト」を発足しました。若い世代へ月経の正しい知識と対処法を伝え、月経とポジティブに向き合えるようサポートする社会貢献活動です。



2. 既存の月経教育への課題とプロジェクトの理念

従来の学校教育における月経教育は、男女別々に行われることが多く、動画視聴などの受動的な形式になりがちでした。その結果、内容が記憶に残りにくく、月経を「隠すべきもの」「ネガティブなもの」と捉える傾向が根強く残っています。

プロジェクト名の3つの「P」には、不安や偏見をなくす「Peaceful (ピースフル)」、自分の体を大切にする「Precious (プレシャス)」、月経を正しく理解する「Period (ピリオド)」という願いが込められています。単なる知識の付与ではなく、体験を通じて自分事として捉え、周囲への思いやりを育むプロセスを重視しています。

3. 小学校における月経教育の取り組み

プロジェクトの主な活動は、小学校での出前授業です。子どもたちがわかりやすく、かつより深く理解できるよう、月経の原理だけでなく生活に即した内容も交えながら授業を行っています。また、男女ともに学び合う環境づくりを重視し、男女共修形式を基本としつつ、学校の要望に応じて男女別形式にも対応している点が特徴です。

(1) 授業の内容

授業は、タカギの社員が講師となって、月経に関する講義パートと子どもたちの興味を引く体験型・実践型の実践パートで構成しています。

• 講義パート：

月経の仕組み、経血量の変化、月経時期間中の体調の変化、生理用品の種類や使い方など

• 実践パート：

紙ナプキンの付け外し、吸水実験、グループワーク（例：生理用品にかかるお金のシミュレーション）、クイズなど

（２）教育の成果

授業を受けた近畿大学附属小学校４年生や関屋小学校５年生を対象としたアンケート結果から、以下の高い成果が示されました。

- 78%が授業を「面白かった」と回答し、「面白くなかった」は0%
- 「男女が一緒に良い」「どちらでも良い」と答えた児童は90%以上
- 自由記述では、「生理について知ることができて安心できた」「男は生理がないけど男女関係なく知っておいた方がいいと思う」「女の子が困ってたら助けたい」「お互いわかり合って支え合いたい」といった、男女が共に学ぶことへの肯定的な評価と相互理解に基づいた支え合いの意識を示す声が多数寄せられた

これらの結果から、体験型・実践型プログラムが子どもたちの興味を喚起していること、そして男女が共に学ぶことで、正しい知識の習得に留まらず、助け合い、支え合う意識が生まれていることが明らかであり、「Happy（ハッピー）プロジェクト」が心の変化を生む活動になっていると考えています。

４．今後の展望とリプロダクティブ・ヘルス/ライツ

子どもたちが自身の体のサインである月経を正しく理解し、自他ともに認め合う環境を作ること、リプロダクティブ・ヘルス/ライツの観点からも非常に重要です。自分らしく快適に過ごすための「選択肢」を若い世代に提供し続けることで、誰もが健康で前向きに生きられる社会の実現に貢献していきます。

Ⅲ．意見交換

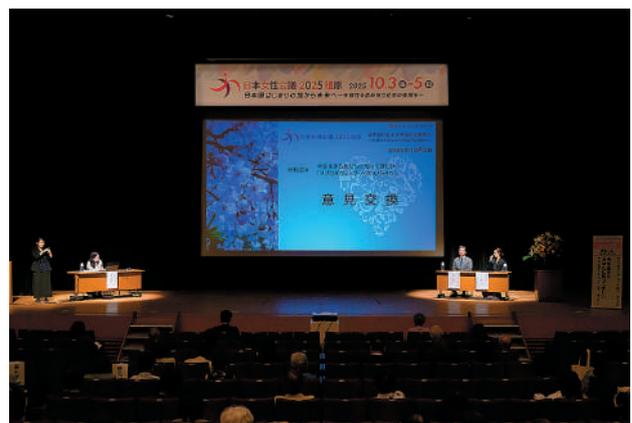
コーディネーターの島本先生、シンポジストの木村先生、高木社長の３名が、教育者、産婦人科医、企業というそれぞれの立場から、リプロダクティブ・ヘルス/ライツを「いかに若い世代に伝え、社会全体で支えていくか」に焦点を当てて意見交換を行いました。

１．包括的性教育（CSE：Comprehensive Sexuality Education）という視点の提示（島本）

リプロダクティブ・ヘルス/ライツを伝える上で、国際基準である「包括的性教育（CSE）」の考え方が重要です。包括的性教育は、日本で一般的な「性教育＝体や健康の知識」だけでなく「人権とジェンダー平等」「性的同意と安全」「人間関係と感情」「文化・社会メディアとの関係」といった非常に幅広い概念が含まれており、意思決定・共感・自己肯定感をなどライフスキル向上につながるものであると位置づけられています。一方、日本では、教育の内容やタイミングが限定的で画一的であることや性に対する否定感などが課題として挙げられます

２．企業によるリアルな体験型教育の実践と今後の展望（高木）

「Happyプロジェクト」では、教育課程とは異なる立場から、月経の仕組みや体の仕組みだけ



でなく、生理痛や経血の漏れなど先輩女性としてのリアルな体験談を伝えること、ショーツやナプキンに触れながら体験型の授業を中心にすることを重視しています。活動を始めた当初は男女共修での実施に戸惑う先生方もいましたが、生徒たちが純粋に受け止める姿に、大人たちにも新たな発見がありました。現在はCSR活動として地域も回数も限定的な実施ですが、今後は大学生などを講師に育成し、回数やエリアを拡大してスケールを大きくしたいと考えています。また、さらなる展開のために専門機関等との外部連携を強めることが課題です。

3. 性教育のタブー打破と患者の意思を尊重する医療のスタンス（木村）

性がタブー視され性教育や情報が隠されている現状を打破すべきだと考えています。若い世代に恥ずかしがらず、正しい情報をポジティブかつ正確に伝える姿勢は非常に正しいと考えており、産婦人科医として一緒に連携に協力したいと思います。また病気という理不尽な状況で多くのものを失いかねない患者さんに対し、治療だけでなく「どう生きたいか」という人生の目的を医師にも相談してほしいと願っています。方法論としての難しさはありますが、個人の努力に留まらず、一人ひとりの意思を丁寧に聞き取るスタンスを業務全体で構築し、組織として取り組んでいくことが重要だと考えています。

IV. 総括：多様性の理解と連携の必要性

島本先生が本分科会について以下のとおり総括しました。

-
- 今回のシンポジウムは、異なる立場からのリプロダクティブ・ヘルス/ライツへの取り組みの最前線を報告し合い、共通の方向性を見出す試みから計画したものである。
 - 木村先生からは、最新の生殖補助医療の活用として、がん患者さんへの未来をつくるのが可能となっていること、新たにその技術を活用する患者さんの生き方に対し、医療や支える者の真摯な向き合い方が求められることが報告された。これは、今後、リプロダクティブ・ヘルス/ライツに関わる医療が進展し、それをどのように活用していくかを、社会全体で理解し、判断していく一例となる。
 - 高木社長からは、地域での教育活動の実践の試みについて報告された。学校教育全体の中でこれらの事例が活かされていくためにも、産官学の連携のもとで、包括的な性教育が進むことを願う。

このシンポジウムを通して、立場の違いや価値観の違いがあるからこそ、それぞれに発見があり、学びがあるという認識を共有できました。医学（今回は産婦人科）、企業、地域、家庭、教育機関など、あらゆる異なる立場が、リプロダクティブ・ヘルス/ライツという一つの共通認識のもとで連携し、個別性と多様性に応じた情報交換や取り組みを皆様と共に推進していければと考えています。

分科会6 提言

【自分を大切に、他者も大切に】

医療・教育・企業・地域が連携し、教育と医療の両面からリプロダクティブ・ヘルス/ライツに基づくライフコースの自己決定を支援します。